

「教科書も進化する」というのが、医学書院の新刊、『内科学Ⅰ・Ⅱ』を手にとった時の第一印象であった。図表を数多く入れて理解を助けていること、系統ごとに「理解のために」という項を設けて、基礎研究の進歩、患者へのアプローチ、症候論、疫学、検査法などをまとめていること、疾患ごとの記載でも疫学を重視し、新しい試みを導入していること、などであろう。膨大な内科学の情報を、2巻に凝縮した編集の努力も、大変なものであったと推測される。その意味で、新しい内科学教科書の1つの型を作り上げたと言えよう。

序文にもあるように、内科学は医学の王道であると言ってもよい。病気を正確に把握し、できるだけ患者に負担をかけない、侵襲の少ない方法で治療するのが、医学の究極の目標だからである。この目標を達成するためには、基礎研究の成果を活用することが不可欠である。内科学こそは臨床医学の中でも最も生命科学に基礎を置いた分野であり、その理解なしに診療にあたることは困難である。本書ではそのような配慮が十分になされていると言える。

とは言え、内科学は、あくまでも臨床医学の1分野であり、対象とする患者は異なる遺伝素因を持ち、異なる環境に住む社会的な存在としての人間である。医師はその片足を近代科学に、もう一方の足を人間科学に置いて活動しなければならない。本書の冒頭に「社会のなかの内科学」という章が立てられているのは、その意味で誠に適切な配慮であると言えよう。序文にも「患者との関係や社会的な問題

にまで十分配慮した内容とする」と書かれている編集の意図は、これからの臨床医学の重要な2つの方向を示したものである。

本書は、最初の計画以来12年の歳月を費やしたとされている。2段組みで約3000頁に及ぶ内容、700名近い執筆者から考えて、それは止むを得なかったことであるかも知れない。ただ1つ注文をつけるとすれば、長い時間がかかったため、新しい分野の記載がやや不十分になっている箇所があることである。例えば、生物学の中ではやはりヒトゲノムの解読の完成と、その臨床医学へのインパクトについての項目があることが望ましい。また昨今流行語にもなったメタボリック・シンドロームや、それに伴うNASHなどの疾患についても、より詳細な記載が望まれる。それらの点が改訂の時に追加されれば、より完成度の高い教科書となるであろう。

内科学は臨床医学のあらゆる分野に必要な、基礎臨床医学とも言うべき領域である。その巨大な領域に本格的に取り組んだ密度の高い本書は、恐らくすべての臨床医学を専攻する人々にとっても十分参考になるものである。この新しい、本格的な内科学書が、幅広く活用されることを期待したい。

A4変型・頁3268・定価33,600円(本体32,000円+税5%)

2006年 [ISBN978-4-260-00002-4] 医学書院刊